

歴史小説交響曲 平城京

シンフォニー

ナラノミヤコ

他一編・藩主の船

なみなしまる
波奈之丸

とうおびとひさあきら
藤首悠亮著

歴史小説 交響曲 平城京

シンフォニー

ナラノミヤコ

なみなしまる

他一編・藩主の船 波奈之丸

とうおびとひさあき

藤首悠亮著

（前書き）

新羅・大唐に比肩する国家として日本の外観が辛うじて形成されたのは、平城京に新都が建設された時代である。左大臣石上朝臣麻呂と右大臣藤原朝臣不比等に権力が集中し、二人が一体となつて総指揮を採つた時代でもある。国の基本を天皇中心とする形とし、儒教・佛教を重点としながら学問・文化を興隆させ、律令制・官僚制という朝廷政治制度を定め確立した。

千三百年の時の流れの中に、平城京はいずれともなく消え去つたが、麻呂と不比等の姿は歴史の上に生きているのである。我が国は二千年の歴史上で一度たりとも他民族に敗北し、其の支配下に屈したことが無かつた。汚染させず純粹培養された日本の伝統・文化を護ろうと考へ訴える者に対し、敗戦後の軽薄な風潮は・非民主主義的・反社会主義的・保守反動的・反民主憲法・男尊女卑等々の悪罵を浴びせ嘲笑した。更に敗戦の最大要因が先進科学技術を基盤とする工業生産力の差異にあつたと分析した。

この為に科学的・西洋合理主義的思考が過度に尊重され日本の伝統的なものが蹂躪された。そして恐るべきことには、人間の尊卑の概念が其の価値を奪われ存在を否定されたことである。

本書に於いて心掛けたことは〈平城〉の京都に生きて居た人々の考へに沿ひ従がい、歴史的事実を事実として肯定する事。それは米国の軍政下での義務教育により養われた、自分を支配する価値基準を捨てることである。

其の一 疫病や早魃など人の力を超えるものに対する畏怖と、その災難から人を救い出す神霊が存在していたことは事実であつた。

其の二 神と人との間の存在として、神聖天皇の地位が万民に等しく認知され尊崇されていたことは事実であつた。

其の三 天皇の下に親王・貴族が特権階級として存在し、更にその下には良民・賤民・奴婢の身分が存在したことは事実であつた。

日本紀（書記）を編纂する不比等に「後の世の人如何に考へむ？」と何度か言わしめた。我々は今、日本書紀を手にして、不比等に応えねばならぬ時が来ているのではあるまいか。

皇極天皇【西暦六四五】年、飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿が中大兄皇子の手により殺戮された。この事件を乙巳の変と言ひ、又日本の国家形成の原初となる政治事変【大化改新】とも言う。左大臣石上麻呂はこのとき六歳であつたが物部宗家の嫡子の子として武器を握られ死を覚悟した。甘樫の丘が火炎に包まれるのを記憶していたが、右大臣藤原不比等はそれから十三年後に生まれたのだった。

百村江の戦いに麻呂は参戦したが不比等は未だ三歳の赤子だった。壬申の乱の時には不比等は十四歳の少年であつたが、一族の氏上の中臣連金が右大臣であり、乱後に斬首され不比等の立場は微妙だった。麻呂は大友皇子の死の最期を唯一人で看取り、御首を抱いて大海人皇子の面前に立つたのである。この時期に十九歳遅れて生まれて来たという事は、生涯どうしても越える事の出来ない二人の上下関係だった。

二十年前、同時に大納言になつたが麻呂が上席であつた。そして今、不比等は麻呂の下位の右大臣だった。麻呂がちょうど還暦を迎えた年のことだった。藤原京を捨て平城京に遷都する際に、天皇の次の位に座る左大臣の麻呂が旧都の留守という閑職を勤めた。不比等の専横を

陰でなじる声も上がっていたが、麻呂は全く意に介する風が見えなかった。新都で今後行われる様々な改革にもう意欲をなくし、倦んでいたのかも知れなかったが、輝かしき遷都の栄光を次席である不比等に独占させた。

麻呂の娘が不比等の三子馬養の妻となり広嗣・良継を生んでいた。不比等は十六年ぶりとなる遣唐使船を過去七回の二艘から四艘に倍加し五百五十人の陣容で派遣することにした。二十二歳の馬養を従五位下に昇叙させ副使に任じた。

十数年の後勲学を終え帰国する予定の留学生に莫大な金銀財貨を与え特別な任務を課した。それは、貴重文書の大量輸入命令だった。

元明・元正と女帝が二代皇位をつなぎ不比等の孫首皇太子の成長の時を稼いでいた。皇太子妃の安宿媛も不比等の孫であった。皇子の誕生を期待されていたのだが、未だにその兆しが無く、先々の皇位継承に不安があった。

養老元（七一七）年三月三日、長屋王邸の曲水の宴席で麻呂は七十八年の生を終えた。不比等は三年後、日本書紀の完成を見届け、この世から消えた。六十三歳だった。

麻呂と不比等の後は聖武天皇の勅令すら撥ね返す力量の天武天皇の孫長屋王であった。しかし八年後、何等の罪も無い左大臣長屋王は、権力奪還を目指す不比等の四子に殺害されてしまうのだった。

そして八年後の天平九（七三七）年、この藤原四子全員が突如として半年間で病死する。藤原鎌足から不比等そして四子へと宮々として築き上げてきた藤原氏の終焉と見えた。藤原復権を目指し過激に反政府活動を繰り返す不比等の孫・広嗣は大宰府に左遷されてしまう。そして広嗣は藤原四家の総意を得られぬまゝ孤軍九州で挙兵するが敗北し斬首された。

天平十二【七四〇】年十一月のことであった。

広嗣は未だ、妻も子も無い二十代後半の若き公達だった。

おわり

大化改新

乙巳の変おっしへん

やるな《蘇我入鹿を討つ》と、直感したその決め手の一つには……

佐伯子麻呂と葛城稚犬養網田の二人の姿を、中大兄皇子の身辺で見た、と、言う、最近の報告が複数あったからである。佐伯氏と葛城氏は古の強勢が嘘のごとくに衰微しており、その支流の末孫で唯単なる武人の若者が、皇后の第一子に近侍するのは極めて不自然な姿であった。そのこととあわせて、二人が連れだち門を出入りする挙動にも、どこか以前とは異なる怪しげな雰囲気を感じ、宇摩乃は同族の手の者に二人の身辺を洗わせていた。飛鳥板蓋宮(六四三)に遷る前の飛鳥岡本宮(舒明朝)での十年を合わせ、今日まで十二年間に亘り、物部の嫡孫物部連宇摩乃は宮廷の軍事・警察の長官職にあった。

突如として中大兄皇子が現れて、自ら宮門閉鎖を命じた。

同じ日に高麗・百濟・新羅の三国が貢ぎを奉る事は異例である。

守門を厳重にすることの指示は妥当だが、事前通告は何等無く、警備の人員は通常配置である。そして皇子は、かかる事態の最中に、

禄を給うから當土府を一所に召し集める?と、言う。

中大兄皇子の言辞に深い疑惑を抱いたが、

《入鹿を逃がしてはならぬ》

と、宇摩乃は瞬時に決断した。

そして十二の通門の衛士府に

【たとえ大臣と言えど、固く門を閉ざし阻止せよ。若し、太刀を抜きたれば躊躇せず射殺せよ。違命者は罰せられ、類は親族に及ぶべし。各員奮励己の責務を果たせ】

と、驚愕すべき内容の指令を発した。

雨滴を頬に感じた宇摩乃は、衛舎に入り小刀を握り締めると、木簡を無心に何枚も削った。

猛然、太刀を振るう入鹿と、書き、文字を眺めた。

曾祖父尾興、祖父大市御狩、祖父の弟守屋、父目、三代およそ九十年に亘る宿敵の蘇我に抱き続けて来た闘志が、こんこんと五体に心地よく充満して来た。

桧皮板の屋根を激しく叩く雨音が、恰も乱入する蘇我の護衛の叫び声の如くに聞こえた。宇摩乃は立ち上がり、強弓を執り二十本の矢の入った鞆(ユキ)を背に負い外に出た。空耳ではなかった。

正門に古人大兄皇子が大声を出し暴れていた。

宇摩乃は弓に矢を番え

「しずまれ」

と、恫喝し、歩み寄った。

蘇我氏が次期皇位に推戴するのは古人大兄皇子である。

その皇子が冠も失い履も脱げ独りで錯乱して居る姿を目撃し、予感的の中を確信した。遠巻きに怯え逃げ腰の衛士に向かい

「たぶれ

狂人を兵舎へ」と、宇摩乃は叫んだ。

暗黒に覆いつくされた甘樫丘の空を、轟音と同時に雷光が走り豪雨となった。

知れば丘の上から殺到して来るであろう、東直漢氏やましろのあたいたんに率いられた蘇我の最強軍団を如何にして阻止するか？衛士の過半は蘇我の息が繋った者だ。それらの内なる敵にも備えねばならぬ。敢えて周囲を恫喝し、皇子を隔離したのはこの為だった。兎も角、騒ぎ立てる皇子を甘樫の丘に逃がさず、密かに城外へ拉致せねばならぬ。

宇摩乃は開門し、入鹿を待つ武装した五十余人の従者を確認した後、古人大兄皇子の従者が担う輿だけを招き入れ、再び門を閉ざした。

そこへ諸門閉鎖の伝令の最後の一人が戻って来て、手にした酒の入った竹筒を宇摩乃に渡し、片目を瞑った。竹筒は、酒釀之事を職掌とする同族の典酒官からのもので、情報が城内の物部氏の核となる複数者に、伝わり巡る事を示唆する証であった。

碗に移した酒を宇摩乃は飲み干してから、

「日嗣の皇子」

と、励ましの声をかけ、竹筒を渡すと皇子は一気に飲み終え、衣服の乱れを正す仕草をしながら、怯えた眼を虚空に点けて言った。

「韓人からひと

蘇我臣を殺しつ。吾が心痛し」

皇子を乗せた輿の左右を四騎の物部に固めさせ、方角が甘樫の丘とは反対の大原の里を目指し、東の門から送り出した。*この機を捉え奴婢に落とされた数百人の物部の奴を開放する。その主が蘇我氏の係累であれば殺害させる。*石上神社の朝廷の武器庫を蘇我に奪われぬよう防衛させる。*連続して先制攻撃を加え、敵陣営の戦意を喪失させる。等々宇摩乃は沈黙考しながら

【此処で我が物部が他氏を凌いで飛翔するのだ】と、覚悟をきめた。

明日香は古くからの倭漢氏の根拠地であり、進んだ技術を持つ今帰の渡来人を統率し、蘇我氏と結んで開いた土地であった。住む者は十の内、他氏は二と言われていた。何よりも恐れるべきはその軍事力であった。宮城内の各所から武器を手に、宇摩乃の営舎に駆けつける物部が様々な情報を伝え合った。

【天皇が何処へか去り、後を追って高官達の姿も消えた】と言う。

馬蹄の響きを耳にして宇摩乃は営舎を出た。

宮城内の処方からかき集めた二十頭あまりの馬に、騎射の巧者を選び騎乗させ任務を与えた。

「諸門を巡り、蘇我の威を借り日頃から反抗する何人かを問答無用に殺せ。全速で飛鳥川の対岸に渡り、甘樫丘へ通報する姿を見たら捕殺せよ」

酒筒を持ち帰った先ほどの物部の伝令が「犬猫もか？」と、言ったのを聞き、騎馬隊がどっと笑い駆け散った。そして八年前に北辺の蝦夷討伐軍に徴兵された、経験のある衛士を数組に分け、建物の影に陣取らせた。

「武装の兵士が宮門に入るは軍防令違反なり。天皇に対する不敬。それを阻止するは汝等の責務」と、命じ「開門」と、宇摩乃がどなった。すでに入鹿の危機を聞き知った五十人の倭直漢氏の精鋭が猛り狂って殺到して来た。

天には暗雲が厚く垂れ込め風雨は益々激しくなっていた。もしもこれが晴天であれば、甘樫丘の眼下にある飛鳥板蓋宮の騒乱はすぐに判り、怒涛のごとき援軍に蹂躪されていたであろう。

水嵩の増した飛鳥川に飛び込み激流に流される蘇我の兵士を、物部の騎馬が執拗に追掛け矢を射た。

逃げ帰った兵士の報告を受け、蝦夷と倭漢はどうするであろうか。

【天皇が逃げ去った宮を守ってなんになるか】

宇摩乃は甘樫丘を攻撃しようとして決意し自邸に陣を敷き、軍勢を増強すべく夜を徹して四方に伝騎を放った。翌朝、宇摩乃は甘樫丘の麓へ軍を進め、蝦夷・入鹿の軍情を偵察し攻撃の端緒を掴もうとしていると、突如、黒煙が上がった。始めそれは蘇我軍の狼煙かと見えたが、火勢は瞬く間に丘一面に広がった。蝦夷と入鹿の豪壮な邸が燃えているのだった。

【自ら退路を断ち決戦を挑む作戦なのか？】

【よし、倭漢直、来るなら来てみる】

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。